

長野県革新懇ニュース

2020 年 7 月号
発行日 7 月 10 日
会 費 2,000 円
購読料 3,000 円 (送料込)
振 替 00510-3-15971

254

発 行 日本と信州の明日をひらく県民懇話会
(長野県革新懇) 発行人：山口光昭 編集長：高村裕
〒 380-8790 長野市県町 593 高校教育会館内
TEL：026-234-1231 FAX：026-234-2219 メール：mail@nagano-kakushinkon.com

==== 今号の主な記事 =====

- 1 面 神山征二郎さんインタビュー
- 2 面 1 面続き、「近現代信州の歴史回廊」桂木恵さん
- 3 面 コロナ禍のもとで、考えよう！核兵器・地球・私たちの未来
新聞意見広告掲載で、憲法 9 条を守る世論喚起
読者の声、漢字パズル
- 4 面 「雨よ降れ」「絶望」と「希望」 窪島誠一郎さん
「写真で迫る信州と戦争」北原高子さん
映画評論「タクシードライバー」内山到さん

長野県革新懇

検 索



1941 年岐阜県生まれ。1971 年『鯉のいる村』にて監督デビュー。1976 年『二つのハーモニカ』により日本映画監督協会新人奨励賞受賞。その後独立し、1983 年『ふるさと』を発表。文化庁優秀映画奨励賞を受けるなど国内外で高評価を受ける。1987 年『八子公物語』を大ヒットさせ、山路ふみ子映画賞受賞。

『時の行路』は 今、撮るべき物語だ!!

こうやま せいじろう
神山 征二郎さん

(映画監督)

実際に起こった 派遣切りがテーマ

Q 監督の最新作『時の行路』の制作経緯をお聞かせください。

この映画は作家の田島一さんが書いた『時の行路』3 部作が原作です。奇しくも私の 30 作目の作品となりました。内容は 2008 年のリーマンショックの時に起こった大手自動車会社の派遣切りにかかわるたたかいや人間模様を描いたものです。この年に製造業を中心に大規模な派遣切りがあつて、年越し派遣村などの様子が大きく報道されたことを覚えておられると思いますが、この物語は、実際に 1400 人の大規模な首切りが行われた会社での出来事をもとにしています。ストーリーは、主人公が理不尽な首

切りに抗して、労働組合を仲間とつくり、裁判を行つてたかうというものです。主人公は、青森県の八戸市に妻と二人の子どもを残し、静岡県三島市の自動車工場で派遣労働者として働いていました。ところが、リーマンショックのあおりで契約期間が残つていないにもかかわらず、突然解雇通告をされるわけです。当然再就職の斡旋がされると思つていたところ、なんら誠意ある対応がされず、寮からも追い出されそうになります。そこで、仲間と一緒に労働組合を結成し、たたかいはじめ、裁判闘争までおこなうわけです。その途中で、八戸に残してきた妻がガンで亡くなるという悲劇が襲うというものです。

現代日本社会の あり方に疑問

Q どのような理由で監督を引き受けられたのですか？

もちろん原作を読んで感銘を受けたことが一つの理由ですが、もともと今の日本の社会のあり方に疑問をもつていたことも一つの理由です。

特にこの前亡くなった中曽根康弘さんが首相のときに、行った国鉄や電電公社の民営化のころから変だなど思つていました。民営化というのは普通の会社になるということですから、いろいろ取り繕つても利益第一主義にならざるを得ません。そうすれば公益性、公共性は後景に退き、必然的に利益を優先することになります。また、民営化の際に労働組合を徹底してつぶして、多数の犠牲者が出ましたが、あの頃から労働運動も厳しくなりました。民営化以降全国でローカル線が廃止されたり、第 3 セクター化されていきますよね。そのしわ寄せは、地域の利用者にいくわけです。そもそも JR が黒字だといいますが、赤字路線をどんどんつぶしていったので当然の結果です。別に経営手腕の賜物ではありません。

日本国憲法こそ 世界に誇るべき

今回の映画では直接扱っていませんが、私が感じているもう一つの問題は教育や社会の右傾化のことです。私は 1995 年に『ひめゆりの塔』をつくりましたが、当時女子師範へ行った子どもは大体勉強はできる子でした。みんな勉強ができる子だから皇民化教育つまり、我々は天子様の

いうことで売り上げをあげられないものは不良社員ということになるようです。だから、この間の簡保の事件のようなことが起こるわけです。

映画の原作は経済問題がテーマなので、映画化にあつたって経済関係の資料を読み漁りました。そのなかで、非常に印象に残っているのが、当時日本大学教授の水野和夫さんが書いた『資本主義の終焉と歴史の危機』（集英社新書）という本です。水野さんは資本主義経済が大ピンチなんだということを書いておられます。それは僕も感じていたことです。たとえば国鉄や電電公社、郵政を民営化しなければならぬということはどこかで歯車が狂つている、我々が生きている時代が壁にぶち当たつていると感じていました。その挙句の果てにリーマンショックがきたわけです。その結果、大規模な派遣切りなどのリストラが横行されました。現在コロナの問題でまた新しい苦しみにおち当たっていますが、これも今後の社会のあり方に大きな影響を及ぼすのではないかと思います。

※全国ニュースは 7、8 月号が合併のため今月はありません。
.....
子として生まれたから天子様のために命を惜しんではならない、そうすることにによって日本の国が栄えるから命を惜しんではならないという教育、それがすんなりと注入されたわけです。そこが教育の恐ろしさだと思います。初等教育のときが一番ものを覚えるわけです。小中学校の時の頭脳は抜群の吸収力をもっています。だから間違つた教育をするとそれがすんなりと入つてしまします。

私は 1941 年生まれなので小学校に入ったのは 1948 年ですが、いわゆる皇民化教育は良くなかつた、間違つた戦争をしてしまったという反省のもとで行われた民主教育の申し子です。体育の時間という、先生が散歩に行こうなんて言つて、皆で学校近くにある山に登つて、1 時間遊んで帰ってくるみたいな教育を受けて育った人間なんです。

だから戦後教育はいいなと思つていたら、どうも戦後教育には問題があると言いだす人がたくさん出てきて、昔の教育も悪くはなかつた、今日日本があるのはあの戦争のおかげだという論調がたくさん出てきて、その種の本が書店に山積みされています。つまり日本の戦中戦前は悪くないという論調です。それが教育の中にも反映してきていることに危機感を感じます。

私は社会性のある映画とか教育問題を扱った映画を作っている、以前生まれ故郷の岐阜県をはじめとして志を